第十章　古墳・遺跡・遺物・構築物

1. 高角城跡

この城は、曽井城と共に平氏一族が居城し、三日平氏の乱で討伐をうけた城である。勢陽五鈴遺響には「寺方乳位山上ニアリ、旧ト高角寺方一邑ニシテ、北ヲ寺方南ヲ高角ト後世二分置ス」とあり、大日寺周辺1.2haほどの範囲と考えられる。この城は古くから築かれ元久元年(1204)三日平氏の乱に、平家の一党若菜五郎が城郭を構えたところである。

城は、養老３年(719)伊勢国司門部主管が築き、天平７年(735)行基に替り、文治元年(1185)には、源頼朝の臣加藤次景が守ったと伝わるが、証拠はない。

元久元年、高角城主若菜五郎盛高、富田家資の子孫富田基度や雅楽助三浦盛時が挙兵し、伊賀・伊勢の守護山内首藤経俊を追ったが、五郎盛高は関の小野（亀山）で戦死したと言うことである。

建武元年(1334) 高角城は、千種の臣伊藤監物吉治が守ったという。

高角城があったとされる現大日山

2. 曽井城跡

伊勢平氏の一党として、三日平氏の乱に加わり平賀朝雅の討伐を受けた、志村右衛門尉（曽井入道）が居城したものと思われる。この曽井城跡周辺・保曽井神社周辺には「城の越」「城前」「城屋敷」また「血取場」という地名も残っている。

城というと大きな石垣や堀、何層もの屋根を持つ天守閣という姿を思い浮かべるが、中世の頃の城は、そのようなものでなく、堀は素堀りで石垣はなく、土塁を築いて松等を植えたものである。また、城内にたえず居住していたのではなく城近くの屋敷に居住し、いざ合戦という時に城に詰めたものと思われる。曽井城跡についても裏山に東西にのびる尾

根幅の狭い丘が独立した状態である。堀らしきものは、見受けられるが土塁は確認できない。

三重団地西北端にある城山が坂部城跡であるが、頂上部の南側と西側には今も土塁が残っている。

曽井城跡

曽井城跡から見た曽井の町

3．宝厳山（ほうげんざん）　真教寺　（曽井町）

宗派：浄土真宗本願寺派

創建：寛永２年(1642)

真宗寺院の本堂の多くは、東向きに建てられているが、真教寺の本堂は、何故か南向きに建てられていた。この本堂は、尾平村の欣浄寺より移建されたもので、移建前の建立年代は、元禄10年(1697)と比較的古い方で、現に建築様式をみても古風な手法がとられているところを多く見かけられた。

安政６年(1859) 欣浄寺が現在の本堂を再建するおり、移建されたものであるが、高田派の本堂が本願寺派の末寺へ移建されたことは一考を要する。

現在、真教寺は廃寺となっており、明治８年には、曽井学校開校時の仮校舎として使用

真　教　寺

真教寺の鐘撞堂

されたこの本堂も、屋根廻りの痛みが進み、平成15年に残念ながら解体されている。

解体された棟木には「奉造立　三重郡尾平村　厭穢山欣浄寺　願主住持秀月　元禄10丁丑歳２月吉辰日　大工安芸郡一身田　藤原朝臣長谷川金兵衛善信」と墨書があり、現在は欣浄寺に返還されている。

４．曽井のそり橋

曽井のそり橋

「曽井のそり橋、鎮台（兵隊）さんが通る……」と歌に唄われたそり橋は、保曽井神社の参道の入口、村下川に架けられている。

このそり橋は、石造反橋（太鼓橋）で天明６年(1786)４月にかけられた。長さ７尺、巾５尺、擬宝珠６個を有する神社としては貴重な宝物である。

神様の渡る橋とかの説もあり、保曽井神社へ祈願に訪れる参拝者は先ずこの橋を渡る。そうして神殿までの長い参道を通ることで心を清め、成願するといわれている。伊勢参りに出かける時は、道中の安全を祈ってこの橋を渡ってから出発したともいわれている。

また、文献によると太鼓橋の形は、足元に注意しながら渡ることで、参詣者の気持ちを落ち着かせるため、渡りにくいものになっているそうである。

太平洋戦争の折、軍隊として召集を受け入隊するその日には、村人たちは神前に集い、入隊者の従軍地での安全と勝利を祈願する壮行会が行われた。そうして村人たちの万歳の声に送られ、そり橋を渡って旅立っていったことが語りつがれている。

こうして地域の人々は、この橋を村人の安全と安心、繁栄を約束する橋として守り、何度かの修理を重ね大切に保存されている。

５．円戒壇の跡

跡地は、曽井町字西谷の丘陵地に位置する。天平時代(729～748)聖武天皇が伊勢地方へ巡幸のさい行基大僧正を従えられた。その時、東光山観音寺で行基大僧正は供養のため大導師として法要をつとめ、その寺号を与えるとともに弟子の基弁を住持として遣わされた。

行基大僧正一行が当地に滞在中、山野丘陵を広く視察され、そして基弁は、阿伽井（仏に供える水を汲む井戸）を探して西谷の地に円戒壇を築き、12人の僧に７日間祈祷を行わせた。その満願の日に山頂に登られたところ、東南の方向に、五色の光を放っているところを見つけられた。そこへ行くと霊泉が湧き出していたので、諸僧の驚きが一方ならなかったといわれている。そうして、その泉は甘泉洞と名づけられた。現在も化粧の水といわれている。今も字西谷に円戒谷という地名が残っている。

以上が円戒壇の由来で、附近一帯は緑樹が繁茂し眺望絶景の丘陵地帯となっている。

円戒壇の跡

６．永井遺跡

海蔵川と三滝川に挟まれた標高60m内外の生桑丘陵地南東の麓に、位置する遺跡が永井遺跡である。

遺跡は、標高21mの台地端部にあり、東側に広がる海岸平野との比高は５～10mとなっている。昭和47年に尾平町の区画整理事業に伴い発掘調査され、弥生時代前期から鎌倉時代までの遺構と遺物が検出された。

弥生時代前期では、住居跡は確認されなかったが、狭い台地端部には弧状に並行して続く６条の大溝がある。出土土器の中には、尾張・三河地方に多い水神平式系土器が混在していて、伊勢湾を挟んだ何んらかの交流が考えられる。石剣・石鏃・石斧・石包丁・石匙などの石器も多い。

弥生時代中期では、二基の方形周溝がある。埋葬施設は確認されなかったが、溝内から壷形土器が出土している。住居跡は確認されていない。この時代の土器には、畿内的な色彩の強いものと、尾張・三河地方の影響をうけたものが混在する反面、伊勢湾地方固有なものもある。この時代において東西の両文化の影響を広く受けていたことが知られる。

永井遺跡

弥生時代後期では、19棟の竪穴住居跡、古墳時代後期では６棟の竪穴住居跡、奈良時代では６棟の竪穴住居跡と11棟の掘立柱建物跡が検出され、それぞれの時代の土器が多く出土した。

鎌倉時代では、建物跡は確認されなかったが、道路の側溝跡を思わせる並行した二条の溝跡があり、山茶碗山皿などが出土した。

この時代、三滝川北側の沖積地に水田を求め、断続ながらも各時代に集落が形成されたものと考えられる。

現在遺跡は、再び埋戻され大半は宅地化されているが、その一部は児童公園として遺跡を保存し、記念碑が建てられている。

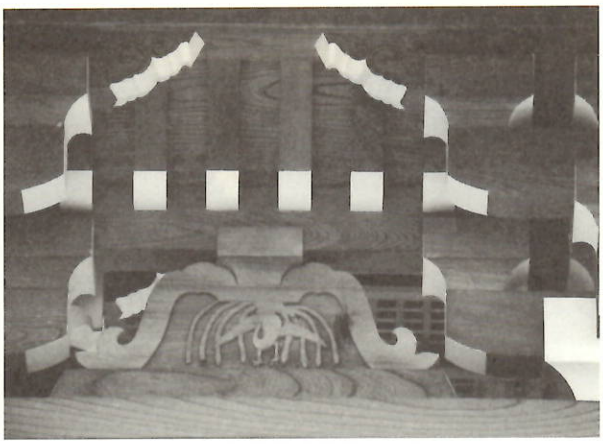
なお、出土品は寺方町北浦の四日市中央工業高校の南の文化財整理作業所（旧理科センター）に保存されている。

永井遺跡の方形周溝墓

文化財整理作業場

7．欣浄寺の鐘楼（しょうろう）

かねつき堂は、寛文13年(1673)前後の建立と考えられてきた、しかし解体の時（平成10年）、鬼瓦にも材木の何れにも製作の年代が見つからず、ただ、鬼瓦の「栄林」という文字は、当山古文書の過去帳にも、また、本堂裏の墓標にも「栄林禅定門」「寛文13年(1673) 7月25日尾平七太夫」とあり、何かの因縁を感じるとされている。ただし「栄林禅定門」「尾平七太夫」は当



蟇股（鳳凰）

山といかなる関係を持つ人であるか明らかでない。

四日市市では、最も古い物とされていたが、老朽のため平成10年に解体された。その際、遺物として蟇股が新しい鐘楼に再使用されている。１つ目は桐模様、２つ目は唐獅子とぼたん、３つ目は鳳凰、４つ目は不明であるがそれぞれ細工が施されている。

また、鐘は、寛文13癸丑年(1673)７月（願主　秀月）大鋳師　勢州津越後守の作品であり、約330年前の江戸期の物だといわれている。

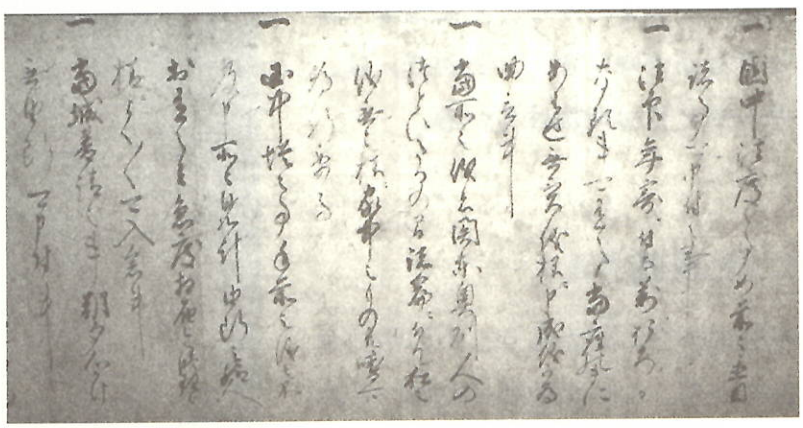
８．豊臣秀次の朱印状

この朱印状は、高角町の竹中輝男氏宅に伝わるもので、竹中家の祖先が豊臣秀吉の書記役を勤めていたことから、竹中家に所蔵されていたものと考えられている。この文書は、「豊臣秀次」の朱印が捺された９ヶ条からなる豊臣秀次朱印状で宛所は記されていない。日付は天正20年(1592)６月20日付で、当時秀次は関白として京都聚楽第に滞在しており、秀次の領国である尾張支配について申し伝えたものである。

内容としては、木曽川の堤防普請の管理と普請計画の迅速な対応や、清洲城の警戒などについて、こと細かく命じたものである。

サイズは縦43.8㎝、横174.5㎝で、こうぞを使った和紙を三枚継ぎ足している。

秀次は、途中天正19年に秀吉に代わり関白となつているが、天正18年(1590)から文禄４年(1595)（この年秀次は、高野山に追放され自害）まで、尾張一国と北伊勢五郡を領有しており、竹中家の祖先が、当地に定住されたことに何らかの関係があったのではないかと思われる。



秀次朱印状の第１条から第５条部分

9．林正寺の『おかご』

林正寺本堂の外陣に、古い「かご」が吊り下げられている。かごは、小ぶりのもので、すだれの隙間から中をのぞくと布張りで肘掛もついており、女性用のものである。このかごは、「おかご」と呼ばれ、林正寺の歴史と共に一つのお話が伝えられている。

林正寺のおかご

現在の本堂建立当時の住職大成さん（11代目）が文久元年(1861)に亡くなり、後継ぎの長男諦聴さんのもとへ、まつよさんが若坊守（住職の妻）として、高角村三軒屋の加藤清左衛門家から輿入れされた時に使ったものである。

その時の情景を想像してみると、高角町の東端の三軒屋から林正寺までの約２ km の道のりを、歩いての行列はきらびやかで、沿道の人々もそれぞれお祝いの言葉をかけたことであろう。

しかし、そのような喜びもつかの間のことで、まだ、幼い長男諦岸さんを元治元年(1864)２月11日に、同じ年の９月16日に夫である諦聴さんをも亡くされたのである。

まつよさんは、大変手先の器用な方で、近在の人々へ裁縫・手芸をはじめ、さまざまなことを伝えられたという記録も残っている。

近所の女性たちと一緒に笑顔で語り合う、まつよさんの声が今にも聞こえてきそうで、そんなまつよさんの喜びも悲しみも見つめてきた「おかご」は、今もひっそりと世の中を見つめ続けている。

10．金剛寺の『お地蔵さん』

金剛寺の境内本堂の左手に祠があり、その中にお地蔵さんが祀られている。このお地蔵さんは、この寺の御本尊「薬師如来」さんは25年に一度のご開帳となっており、普段お参りされる方々は、御本尊のお姿を拝むことができないので、その代りにとして江戸時代末期、文政年間(1818～1829)の本堂再建と

金剛寺のお地蔵さん

同じ時期に、この場所に、安置されたとのことである。このお地蔵さんは、御本尊の身代りで「身代り地蔵」といわれている。

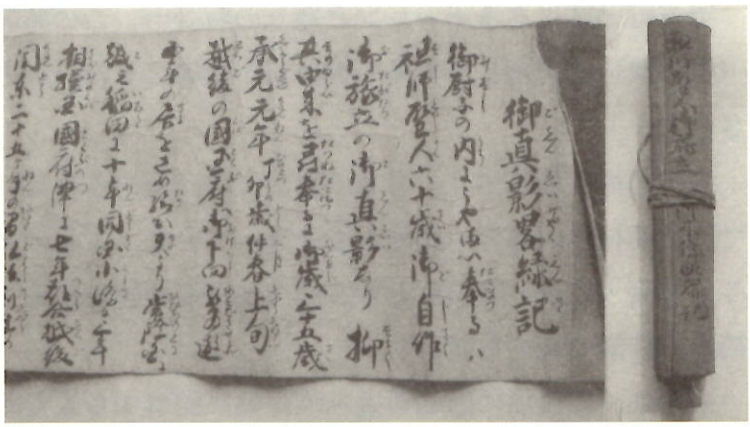
お地蔵さんを拝ませていただくと、色白でやさしく慈悲深い顔立ちのお姿で、よく見ると左手に「薬壷」を持っておられ、これが「薬師如来」の身代りの証である。お地蔵さんとしては、大変めずらしい形である。

11. 日比家の『秘仏』

高角町の日比家では、仏さんとして「親鸞聖人」旅姿の御真影を祀られている。この仏さんに添えられた「祖師聖人御旅立　御木像略縁記」の巻物によれば、貞永元年(1232)「親鸞聖人」御歳60歳の時旅の途中で、ご自身の御姿を聖人自ら刻まれた木像とされており、御姿は、旅装束をした立像である。

「親鸞聖人」は承元元年(1207) 御歳35歳の時, 時の権力者の無法な弾圧により越後の国（新潟県上越市）に流罪となる。その後、５年して冤罪が解け、京へ帰る途中、大祖法然上人の訃報を知り京へ向かうのをやめて関東へ向われる。そして、常陸の国（茨城県）小嶋（下妻市）稲田（笠間市）と相模の国（神奈川県）国府津（小田原市）で２０年あまりの間布教活動をされ、東海道を通って京へ帰られる途中、箱根の峠越で聖人を慕って集まった御門末一同の懇願により、聖人ご自身の御姿を刻まれた木像を、形見として銘々に下されたのが、この木像であるとされている。

親鸞聖人の御木像



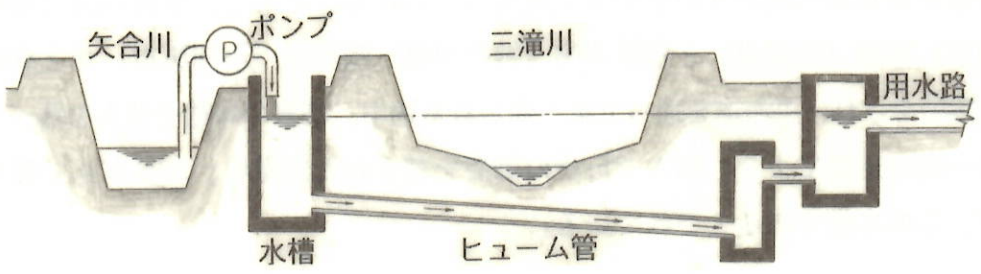
御木像の略縁記

12. サイホン式水路

高角町では、矢合川の水を三滝川と矢合川の両側に広がる水田の灌漑用水として利用している。矢合川と北側の水田との間には三滝川があるが、この川は多くの水が伏流水となっており、増水時と渇水時の水量の差が非常に大きく、また、川幅が広く取水しにくいため川幅の狭い比較的水量の安定した、矢合川の水を利用することとしたものと思われる。

そのため、矢合川で取水した水を三滝川を横断して反対側に送るのに、三滝川の川底の下をくぐって送水できる、入口と出口の水位が同じになる「サイホン式水路」が昔から採用されている。

矢合川の水は、矢合橋の下とその上流約700mの地点で取水しているが、その内矢合橋の下で取水した水を送る水路がこの「サイホン式水路」となっている。現在では、まず矢合川をフーセン式堰堤でせき止め、溜まった水をポンプで堰堤脇の水槽に汲み上げ、三滝川の下に埋設したヒューム管（土管）に流し、三滝川を横断して国道477号線バイパスの近くで噴出させ、その水で三滝川北側の水田を潤している。



サイホン式水路 断面図

13. 時計台

寺方町一区にある赤いレンガ造りの時計台、この時計台は、昭和２年に昭和天皇の即位（御大典）を記念して当時の神前青年団第２支部（寺方町一区）の団員の手によって作製された。

その頃神前地区では、日本の輸出で第一位を占めていた生糸の生産を支える養蚕が盛んで、神前村の大部分の農家が蚕を飼っていた。人家の周囲には、見渡す限りの桑畑が広がり、春蚕・夏蚕・晩秋蚕と年３回の養蚕の季節を迎えると、養蚕農家では、朝早くから桑摘みの作業で多忙を極めた。

当時は、終日畑に出て桑摘みの作業に従事する人たちにとって、時刻を知ることは容易でなく、朝夕の寺院から流れてくる鐘の音で時刻を知るといった、大変不自由な思いをし

時　計　台

ていた。

こうした状況の中での時計の出現は、まさに画期的なものであったといえた。当時の時計は、ゼンマイ式時計で、週に１回ほどネジを巻かなければならなかったが、屋外にいても時刻を知ることができる便利さに大変喜ばれた。

村のシンボル的存在の時計台であったが、第二次世界大戦の最中に時計が止まり昭和20年から昭和25年の間、時計が壊(こわ)れたまま放置されていた。その後、昭和26 年の敬老会発足を記念して西寺方の老人会（仙寿会）により新しい時計が寄贈され、時計台の管理は青年団より老人会に委(ゆだ)ねられ、その証(あか)として前面の石の部分に老人会の名が明記されている。

現在もなお町の風物詩の一つとして時を刻みつづけている。

14. 大日寺の『涅槃(ねはん)図』

一般的には、釈迦(しゃか)入滅の陰暦２月15日（現在は３月15日）に釈迦の徳をたたえて行う法会(ほうえ)涅槃会で、涅槃図をかかげ遺教経を読誦する。

涅槃図は、釈迦入滅の光景を描いた仏画で、サイズは長さ約４ｍ、幅約２ｍで、釈迦が頭を北に向け右脇を下にして横たわり、周囲で弟子を始めとして菩薩から畜類に至るもろもろの衆生（生きとし生けるもの）や母の摩耶(まや)夫人の大声をあげてなげき泣く様子が描かれている。

この涅槃図の裏面には、河原田村・瀬川與左衛門と書かれている。なぜ、河原田村の人が寺方村の大日寺に涅槃図を寄進したのか調査したところによると、河原田村の無足人（無禄の武士）瀬川與左衛門は、文政12年（1829）に本家多助の死亡により家督を相続し、弘化５年（1848）に寺方村と山ノ一色村の庄屋との相談を申しつけられていたことからと推測される。

大日寺の涅槃図